図書展示の可能性

－附属図書館セミナー「明日から使える! 図書展示実践論」をめぐって－

村　田　　輝　（電気通信大学附属図書館）

はじめに

信州大学附属図書館では、2017（平成 29）年 2 月 28 日に公益財団法人東洋文庫の学芸員である岡崎礼奈氏、篠木由喜氏をお招きして、セミナー「明日から使える！図書展示実践論」を開催した。本稿は、当セミナー開催の背景や内容について、筆者の記憶と手元に残されていた資料に基づき、報告するものである。ただし、開催からすでに相当な時間が経過しているうえ、筆者は現在、信州大学附属図書館の職員ではないことから、記述内容はあくまでも個人的な記憶と見解に基づくものであることをあらかじめお断りしておきたい。

１．開催の背景

信州大学附属図書館では、年 1 回程度、図書館職員等の研修を目的とした信州大学附属図書館セミナーを開催している。

このセミナーは、大都市圏から距離があり、業務に関連する研修会やイベント等への参加の機会を持ちにくい信大図書館の職員にとっては貴重な学びと交流の場となっている。2015 年度には「大学図書館におけるアクティブラーニング支援に向けて」[1)]、2016 年度には「明日から使える！図書展示実践論」[2)]と題してセミナーが開催されたが、これらのセミナーで取り上げられたテーマはともに、2015 年 6 月の信大中央図書館リニューアルオープンに関連した内容であった。

中央図書館リニューアルの主な目的は学生のためのアクティブラーニングスペースの整備・充実にあったが、一方で、展示・地域交流スペースが新しく整備された点にも注目したい。中央図書館の所在地である松本キャンパスには、旧制松本高等学校以来の蔵書・資料が継承されており、「小谷コレクション」、「石井鶴三コレクション」などの貴重資料も所蔵している。図書館が所蔵する多様な資料を保存・継承するのみでなく、広く展示・公開し、併せて地域と大学との多様な交流を促すことを目的とした展示・地域交流スペースを整備したことは、地域連携・地域貢献を重視する信州大学ならではの特色を打ち出したものである。

図 1 飯山市展

図 2 「山の日」新設記念展

展示・地域交流スペースが整備されて後、図書館主催による展示のみでなく、各学部・研究室や学外機関の主催によるものも含めて、多様な展示プログラムが実施された。展示の対象は書籍に限らず、アート作品や実物資料も含めて多岐に及んでいる。例えば、2015 年 9 月には地方自治体との連携展示である「飯山市展」（図 1）が開催され、人形作家高橋まゆみさんの作品をはじめ、興味深い資料が展示された[3]。2016 年に開催された「山の日」新設記念特別展（図 2）[4]や「没後 5 年 北杜夫展」[5]では、書籍と写真・実物などとのコラボ展示が行われ、効果的な展示への模索が行われた。

また、このような特別な機会における企画展示とは別に、信大の各図書館では図書の利用促進を目的とした一般図書のテーマ展示を日常的に行っている。もちろん、これは当学に限った話ではなく、最近では大学図書館や公共図書館に足を運ぶと、必ずといっていいほど、一般図書の展示が行われている。それぞれの図書館において、個性的で工夫を凝らした展示が行われており、図書展示は図書館の資料やサービスをアピールする主要な手段となっているといえる。かつて展示は博物館や美術館の領分であり、図書館ではもっぱら標準的分類法に従って書架に配架することが図書の提示の方法であったことを思うと、大きな変化である。

このように図書展示が盛んである一方で、図書館職員の間に展示の理論やノウハウが共有されているわけではないと思われる。展示は博物館学の分野では研究の対象となってきたが、図書館学の分野で話題にされることは少なかった。図書館にとって、図書とはその内容を読んだり調べたりするためのものであり、物理的・デザイン的側面を含めて図書を「見せる」ことへの関心は、あくまでも二次的なものにとどまっていたのではないかと思われる[6]。

このような状況の中で、東洋文庫が付設の東洋文庫ミュージアムでの実践を背景に、図書館等を対象に図書展示に関するコンサルティングを行っていることを知り、関心を持ったことが、

当セミナーを企画するに至ったきっかけである。東洋文庫では、図書館界での展示への関心の高まりと、理論やノウハウに対する需要に対応し、図書館における図書展示への支援サービスを 2016 年 2 月から開始していた [7)]。

2．東洋文庫ミュージアムについて

当セミナーに講師としてお呼びした岡崎礼奈氏、篠木由喜氏は、2011 年に東洋文庫に設置された東洋文庫ミュージアムの学芸員である。

東洋文庫は、いうまでもなく東洋学分野での日本最古・最大の研究図書館であり、国宝 5 点、重要文化財 7 点を含む約 100 万冊を所蔵している。基本的には専門分野の研究者のための図書館であり、かつては利用者への敷居は高かったと聞いている。その東洋文庫が一般の人々への蔵書・資料の展示・公開を目的としたミュージアムを設置したと聞いたときには、時代の変化を感じたものである。図書館も博物館も、その存在意義や活動の姿を市民の目線に立って可視的に示していくことが求められる時代となっていた。

東洋文庫ミュージアムを訪問すると、まず驚かされるのは、約 2 万冊の書籍が床から天井までの巨大な書架に並んでいるモリソン書庫（図 3）である。モリソン書庫は、東洋文庫の基礎をなすモリソンコレクションを収める書庫であるが、資料を保存するだけではなく、膨大に集積された書籍の威容を見せるための展示書庫である点に特徴がある。

図 3 モリソン書庫（東洋文庫）

モリソン書庫では展示ケースに展示された古書と違って、オープンな展示なので管理が難しく、休館日には修復師が状態のチェックに入るという。手間をかけて維持されているこれらの古書を、ミュージアムの来館者は読むことはできない。モリソン書庫は来館者による鑑賞を目的につくられた書庫であり、本来、調査研究のための図書館である東洋文庫にとって冒険的な試みであったのではないか。

また、東洋文庫ミュージアムでは年に３回程度の周期で企画展示が行われているが、当文庫の膨大な蔵書を活用して行われる展示はどれも興味深い。最近では、「本の中の江戸美術」展、「ロマノフ王朝展―日本人の見たロシア、ロシア人の見た日本」、「ナマズが暴れた！？安政の大地震展―大災害の過去・現在・未来」が開催され、本稿執筆時には「モリソン文庫渡来 100 周年　東方見聞録展～モリソン文庫の至宝」（2017 年 8 月 16 日～2018 年 1 月 8 日）が開催中である [8)]。展示資料の多様性に驚かされるとともに、資料自体の魅力を通して設定されたテーマを物語るその方法は、図書館での展示には不足している視点であり、参考になる。

さらには、当ミュージアムが開催しているワークショップにも興味を引かれる [9)]。たとえば、2017 年 11 月 26 日には「Smell Voyage ～本の香りのワークショップ～きみだけの東方見聞嗅録を作ろう！」が開催されている。このワークショップは本の「香り」をテーマとしており、「貴重な本の数々を、目ではなく鼻を研ぎ澄ませて鑑賞」するという斬新な試みである。本を「目で読んで楽しみ、知識や情報を得る手段」として捉える常識的観点からは思い至らないアプローチである。

このように、資料活用をめぐる先駆的な実践を行ってきた東洋文庫が、図書展示に関するコンサルティングサービスを開始したことは注目に値する。図書展示に対する関心が図書館界において高まっているにもかかわらず、そこには十分な知識・技術が存在していないことを見て取った東洋文庫が、実践の中から独自に培った理論・ノウハウを提供しようとするサービスであり、東洋文庫の先見性と自らの技術を生かした社会貢献への積極的姿勢を示すものであるといえる。

３．セミナー概要

附属図書館セミナー「明日から使える！図書展示実践論」への関心は高く、当日は信大の各図書館からのみならず、近隣の公共図書館、他大学の図書館から約 50 人が参加した。思っていた以上に、「図書展示」は現場の多くの図書館職員にとって関心事となっていたようである。また、地域の新聞社による取材もあったが、「図書展示」というテーマでセミナーを開催すること自体が図書館の外から見ても新鮮に映ったのかもしれない。

セミナーは前半の講義と後半のワークショップの二部構成で行われた。前半の講義では、最初に東洋文庫の紹介があり、続いて本を展示する目的と展示テーマの設定、安全に美しく見せ

る工夫、本と人をつなぐ解説のつくり方等についての講義があった。

後半のワークショップでは、信州大学附属図書館で所蔵している図書を使い、グループに分かれて図書を安全に美しく見せるための道具づくりの実習を行った。

以下にその概要を紹介する。

図 4 附属図書館セミナーポスター

(1) 講義

短い時間であったが、図書展示をテーマとした講義は非常に興味深いものであった。筆者が理解した範囲で講義の概略を以下に報告するが、執筆に当たっては、当日に講師の方から配付された講義資料等を参考にさせていただいている。

① 本を展示する目的と展示テーマ

図書館で本を展示することは、図書館（あるいは図書館の蔵書）を活用してもらうための有効な方法であると同時に、知識や情報を発信し、共有するための場所である図書館がその役割を果すための手段のひとつである。

ひと口に図書展示といっても、その図書館の特性や想定される利用者によって目的はさまざまである。図書展示の目的や、期待される効果を明確にし、それに合わせたテーマ設定や手法を取る必要がある。例えば、所蔵資料を紹介したいのか、利用者の拡大や人集めをしたいのか、当該機関の理念や取組みを内外に知ってもらいたいのか、あるいは研究や学習の支援が目的なのかによって、展示テーマは大きく違ってくる。

図 5 講義風景

また、展示テーマを設定しても、それが利用者の興味を引かなければ自己満足になってしまう。時事問題や普遍的な人気テーマ、有名な人物や出来事、○○周年（記念イベント）など、利用者の関心を高めそうなトピックとの関連を考え、テーマを考える必要がある。

さらに、そのテーマに見合った蔵書や資料が必要であり、使用できる展示資料に応じてテーマを広げ、あるいは調整していく必要がある。このような作業を行

うためには、当該テーマに関する専門性のみでなく、所蔵資料を横断的に把握するとともに、日頃から意識的に選書・収集に取り組む必要がある。

② 本を安全かつ美しく「見せる」技術

展示の目的を達成するために、受け取ってもらいたい情報を具体的な資料を通して見せていく必要がある。本を開いて展示することはそのための有効な手段である。本を開いて見せることで、表紙だけでは分からない豊かな情報を伝えることができ、展示の可能性を広げることができる。

見せたい、伝えたい情報が、ある本の特定のページに存在するのであれば、本のそのページを開いて展示することによって、本の「中身」に関心を向け、関心をもつきっかけを提示することができる。例えば、特徴的な挿絵・写真などが掲載されているのならばそのページを開いて展示したり、読んでもらいたい文言が記載されているのならば、その箇所を強調して示すといった工夫もできる。

ただし、本を開いて展示することは、本に負担をかける。「展示」と「保存」は相反する行為であり、なるべく本を傷めず、かつ見やすく設置することが必要である。そこで、展示では本を無理のない角度で開き、固定するための支持具が必要になることが多い。展示資料が貴重書ではなく新しい書籍であっても、安全性を整えて展示することは、展示の美しさや見やすさにつながる。なお、支持具は自前でつくることも可能である。

③ 展示を「魅せる」ための工夫

展示の基本として、資料そのものが安全かつ美しく展示されていることが前提だが、展示室の居心地のよさや展示資料の見やすさを演出することも、来館者の印象を大きく左右する。

展示室全体の演出としては、壁一面を本で埋め尽くしたり、壁紙の色を変えるなどの大掛かりな演出もある。また、照度を下げたり、照明色を変えるなどの工夫によって、展示室内の特別感を演出することができる。スペースを部分的に利用した小規模な展示であれば、範囲を限定して壁紙を使用したり、展示台を布で包んだり、可動式のパーティションで仕切るなどの、比較的手軽で安価な工夫であっても、効果的な演出を行うことができる。

資料展示の工夫としては、開いた本を固定するときに透明なアクリルテープを使ったり、解説パネルの色調やデザイン性に配慮したり、写真や図版などは額装をして見せ方に変化を加えるなど、市販品、事務室内の機器・備品を使用して実践できる方法は多数あり、アイデア次第である。また、展示台・パネル・額装品の高さ、文字の大きさなど「見やすさ」への心づかいは、展示空間を作る際の基本といえる。

④ 本と知識と人をつなぐ解説

展示品を美しく、魅力的に見せることは大切だが、本の展示の場合、美術品とは違って「美しさ」や「楽しさ」をその存在のみで感じさせることは困難である場合が多い。そこで、その資料の内容的価値や見どころを来館者に知ってもらうための解説が重要な役割を果す。

たとえば、来館者が当該資料をめぐる歴史的・文化的な背景への理解を持つことによって、展示資料に対する見方は大きく変わる。その本の見どころ、読みどころを示すとともに、テーマの中に位置づけていくことによって、来館者と資料の「つながり」ができ、「感動」や「関心」が生まれることになる。図書展示を行うに当たっては、展示品への興味を引き出すための積極的な工夫が必須であり、その工夫がなければ単に本を配列しておくことと変わりがなくなってしまう。

解説パネル（キャンプション、ポップ）を作成するに当たっては、限られた字数でどこまでかみ砕いた説明をするのかが課題となる。平易な言葉を用いることが重要だが、文章を簡単にしすぎることで、曲解を招く恐れも生じる。また、その本が展示の中でどのような役割、位置づけなのかを意識する必要がある。

展示テーマとの関連性の中で、歴史的・地理的なストーリーの中に位置づけたり、鑑賞ポイントを提示したり、本の価値を示すためのプロフィールを充実させたり、自機関との関係性を紹介することが有効である。

たとえば東洋文庫では、解説の字数は 180 字ほどで、「語り口調」を意識し、文末は「です ます」調で統一している。また、冒頭に資料の要点を示す「キャッチコピー」付けたり、イラストやマンガを活用するなど、効果的な解説の工夫をたえず行っている。

(2) ワークショップ

後半のワークショップでは、「本を安全かつ美しく『見せる』技術」の講義で紹介された、本を安全に開いて展示するための道具づくりの実習を行った。

参加者は数名ずつのグループに分かれ、信州大学附属図書館で所蔵する新書から大型本までの多様なタイプの本と、東洋文庫で用意していただいた材料を使い、中性紙ダンボールシートを使った支持台づくりに取り組んだ。支持台は、本を美しく展示するとともに、開き過ぎによる折り癖や落丁を防ぐ役割を持っている。作成に当たっては、傾斜の角度や表紙からはみ出さないサイズを測り、それぞれの本に適したものにする必要がある。参加者は苦労しつつも楽しみながら作業を行い、最後にそれぞれのグループが作成したものを講評し合った。

このワークショップで作成したような支持台を、東洋文庫では実際に使用しているとのことである。筆者は、一級の資料を扱い、展示を業務としている東洋文庫ミュージアムなのだから、潤沢な予算で購入した設備を使って展示を行っていると思っていた。だが、話を聞いてみると、東洋文庫も低予算で展示を運営しており、支持台の作成にしても、パネルの作成にしても、ほとんどは手作りで行っているとのことであった。予算が少なくともアイデアと工夫次第で、魅

図 6 ワークショップ風景

力的な展示を実現できるということであり、普通の図書館が明日からでも行える実践である。

以上、セミナーの概要を紹介させていただいたが、講義及びワークショップは内容の濃いものであり、本来であればもっと時間がほしいところであった。ひと口に図書展示といっても、テーマの設定から展示の技術的側面まで、間口は広く、奥が深い。今回、信大図書館の職員からの要望も受けて、理論的な話も聞きたいし、ワークショップも実施してほしいといった欲張りな要望を講師の方に出してしまったが、例えば「展示テーマの設定」といった内容だけでも、充実したセミナーとなるに違いなかった。今後は各論をさらに深めるような研修の機会の設定が期待されるところである。

4．終わりに

最後に、図書展示の今後について、筆者の考えを述べておきたい。

近年、様々な館種の図書館で活発に図書展示が行われるようになっている。その中には印象深く、刺激的な展示もあるが、凡庸に感じられる展示もある。

筆者は図書展示にもイノベーションが必要であると考えている。大学図書館ならば、その大学の最先端の研究成果そのものを展示に取り入れていくべきであろうし、公共図書館ならばその地域の自然・文化・産業そのものを展示に取り入れていくべきであろう。さらには、AI（人工知能）や IoT（モノのインターネット）が急速に社会に浸透しつつある今日において、それらの先端技術を図書館の展示環境構築に援用することによって、今までにない触発的でスリリングな図書展示を図書館が演出することも可能になっていくであろう。

今回の図書展示のセミナー開催を通して、実践的な技術の習得のみでなく、様々なことを考える機会を得たことは筆者にとっても非常に有意義であった。充実した研修を提供していただいた東洋文庫の岡崎礼奈氏、篠木由喜氏及び開催に協力をいただいた関係者の皆様に深く感謝したい。

注・参考文献

1) 信州大学附属図書館．2 月 19 日（金）信州大学附属図書館セミナーを開催しました，
http://www.shinshu-u.ac.jp/institution/library/news/2016/02/219.html
（参照 2017-12-18）

2) 信州大学附属図書館．附属図書館セミナー「明日から使える！図書展示実践論」(2/28)，
http://www.shinshu-u.ac.jp/institution/library/news/2017/01/28seminar.html
（参照 2017-12-18）

3) 信州大学附属図書館．中央図書館で「飯山市展」を開催しています（9/14～10/12），
http://www.shinshu-u.ac.jp/institution/library/matsumoto/news/2015/09/9141012.html
（参照 2017-12-18）

4) 山の日展示プロジェクト チーム.「次世代につなぐ山岳図書～本に見る学士山岳会と小谷コレクション～」報告．信州大学附属図書館研究. 6: 131-143(2017)，
http://hdl.handle.net/10091/00019499

5) 村田 輝.「没後 5 年北杜夫展～作品に描かれた信州松本～」報告 ：北文学の継承と発信のために．信州大学附属図書館研究. 6: 145-155(2017)，
http://hdl.handle.net/10091/00019500

6) 次の文献では、全国の大学図書館における展示の実態調査を行っている。
田中麻巳．大学図書館における展示の実態と図書館員の認識．大学図書館研究．101:83-92(2014)，
https://doi.org/10.20722/jcul.231

7) 東洋文庫ミュージアム．図書展示コンサルティングをはじめました，
http://www.toyo-bunko.or.jp/museum/showoshirase_contents.php?tgid=1454996792
（参照 2017-12-18）

8) 東洋文庫ミュージアム．Exhibition　展示，
http://www.toyo-bunko.or.jp/museum/exhibition.php（参照 2017-12-18）

9) 東洋文庫ミュージアム．ミュージアムワークショップ，
http://www.toyo-bunko.or.jp/museum/workshop/workshop_list.php
（参照 2017-12-18）